

第1回日本X線CT医学会 参加報告

札幌医科大学附属病院 小野志穂

2026年5月16日～17日に、東京都・品川シーズンテラスカンファレンスにて開催された第1回日本X線CT医学会（JSCTM）に参加しましたので、報告させていただきます。

本会は慶應義塾大学の陣崎教授が大会長を務められており、「最先端CT研究会」、「断層映像研究会」、「循環器MDCT研究会」を統合することで新設された学会となっています。今回は「X線・CTの未来を拓く：イノベーションによる価値創造」をテーマに、Dual energy CTやPhoton counting CTに関する講演をはじめ、Motion collection技術、AI活用といった最新技術、造影理論など幅広い内容を専門領域ごとに基礎技術から臨床応用に至るまで網羅できるプログラム構成となっていました。当日の参加人数は360名を超え、会場内は参加者であふれるほどの賑わいでした。北海道からは、シンポジストとして華岡青洲記念病院の山口氏と一般演題に北海道大学病院の川崎氏が参加されており、そのほかにも全国からCT界を代表する著名な方々が放射線技師の立場から情報発信をされていました。

今回、取り上げられていたテーマの中で、特にAIのセッションと造影剤の再利用に関するセッションが多い印象を受けました。AIに関するセッションでは、読影や業務効率化に関する技術や画像再構成法に関するAIなどについて取り上げられていました。医師の立場からは、年々増加傾向にあるCT検査の読影業務において、AIを用いた読影補助システムの発展について聞くことができました。領域にかかわらず診断の感度、特異度の向上が目覚ましく、領域によっては放射線科医の読影に匹敵するレベルまで到達しているという話もあり、とても興味深かったです。また、技師視点からは、日々の業務を効率よくこなすためのAI活用術として、GE社が提供しているClinical Performance Management（CPM）という技術の紹介がありました。このシステムはモダリティから収集した装置の稼働・検査データを用いて検査の集中している時間帯や空いている時間などを可視化することで、検査室ごとの検査内容や検査数の最適化を図り、業務改善につなげるシステムとなっています。CT検査において採血結果確認のため電子カルテを定期的に確認したり、外来予約が入らないため、CT室に医師から予約枠の調整の電話が鳴るといったことは日常茶飯事だと思いますが、これらもCPMを用いることで最適化され、採血結果が出るとRISに反映されたり、予約枠調整の特に多い診療科をピックアップすることで、診療科ごとに枠の増加を行い、電話対応の時間を減少することが可能となるそうです。さらに、検査室が空いている時間帯においては、病棟患者の呼び出すタイミングまでアシストしてくれるといった機能もあるようで、忙しいCT室の救世主となりうる機能ではないかと感じました。

造影剤に関する話題として、従来の造影検査の最適化や造影剤使用量の低減だけではなく、再利用という新たな視点が出てきているのが印象的でした。近年では、SDGs といった観念からマルチユースインジェクターの普及に加え、排泄後に環境へ流出するヨードの回収や使用後のシリンジに残存した造影剤を集め、高温焼却することで滅菌し再利用できるのではないかとといった話題もあがっていました。これらの活動は国内でも進んでおり、限りある資源を有効利用し未来につなげていくためにも、今後重要なテーマになると感じました。

普段は放射線技師主体の学会や研究会に参加することが多いですが、今回は医師の視点からの講演も多く、CT に対する考え方や求められる画像について改めて考える良い機会になりました。今後も、臨床に貢献できる画像提供を意識して、日々の業務や研究に取り組んでいきたいと思います。

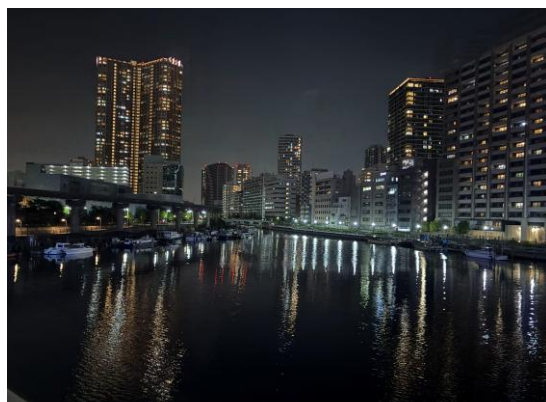
なお、第2回 JSCTM は米国で行われている ISCT と合同で国際学会として、東京開催を企画されているとのことでした。



会場内の様子



講演中の山口氏



品川の夜景